

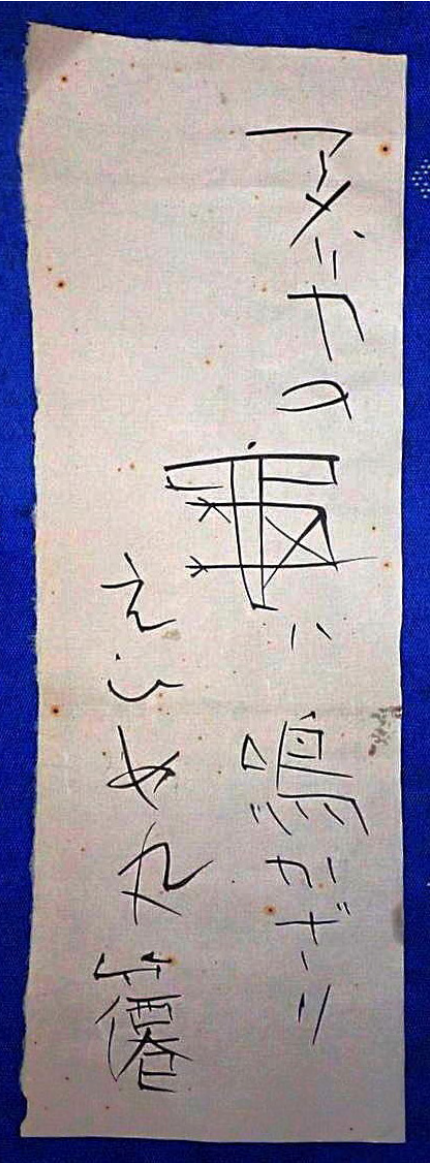
あそ

3

2026



撮影：墨沱

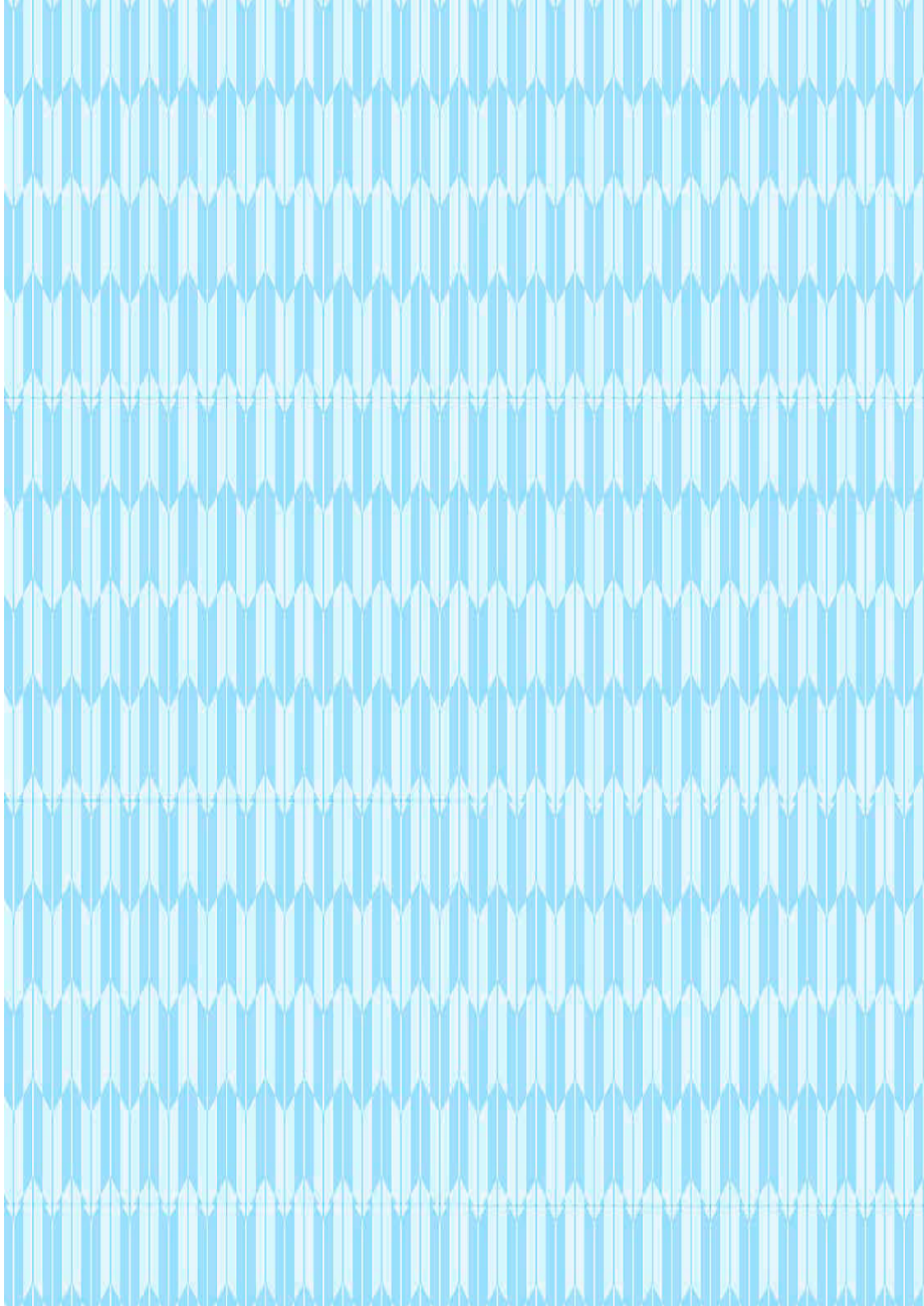


春
蚓
烁
蛇



ア
メ
リ
カ
の
龜
は
鳴
か
ざ
り
え
ひ
め
丸

竹
僊



三月集

坐・誹

佐藤 竹僊

雨降れば雨を見てゐる年つまる

一草で済ます七草粥うまし

枯野に降り前人未踏と覚えけり

枯すすき風を踏まへて立つてゐる

ねこじやらし雨に揺られ枯れてゐる

この棒に雨意のあるらし春近し

猫がさき春がさきだと駈けてくる

朝顔を素見してゆくしじみてふ

重たくてまつすぐに降る額の雨

手で分けて茗荷のぞくと蟋蟀



雁木

七郎衛門吉保

年明けの反社と同じ米のドン
どけどけ！とドローン主義の初荷かな
大寒や加温と加湿目一杯
大雪や長靴買へぬ下駄の朝
ナスパかな兎の足跡雪の原
越後瞽女雁木にほっと頬温む
さゆりさん雁木見上げて瞽女の唄
初場所も旗の揺れをり青・黄色
寒風を裂く駅伝の男子女子
忙しなく解散風や虎落笛

初レヴェュー

篠田純子

踊子のシームまつすぐ淑気なる
初レヴェュー睫毛くつきり乙女達
スケートの削る氷や綺羅ひかる
麗かやさらに増えたる骨密度
紅白梅の盆栽奉納太宰府より
五角ごうかくの箸よく売れて梅まつり



一步

篠田大佳

初仕事今日は真面目な営業部
冬暮れて鐘の残りも消えにけり
寒風を吸ひ肺臓を泳ぐうを
杖つくと人のやさしくなる寒夜
寒の朝古き竹刀の絞り癖
いつもゆく一步の遠き冬の朝
春隣いつも通りの常ならず
無理すれば楽を覚える春隣
春近しいつもの一步を取り戻す

さあ一步

須賀敏子

猫柳取り壊されし古き蔵
我が街のマラソン大会浅き春
玄関に飾る小さき陶の雛
ポールペン三本並ぶ朧月
麗らかや背筋伸ばしてさあ一步
蠟梅やそろそろ日暮香り満つ



芽立ち

長崎桂子

年新た今朝かぜぬくしほほゑまし
氏神様詣でに平和祈るのみ
新年会おみくじは中吉うれし
寒の入り総身のかたなるごとし
止んでまた降り出してをり吹雪かな
庭の木木今朝より雪をいただけり
今朝は雪部屋は温度をさげてをり
年新たお箸いただくありがたき
燈籠を背に草の花芽立ちけり

正月

森なほ子

門松やまたも隣家に後れ取る
門松を結はへる松葉チクチクと
門松は一番早し前の家
夜よりも日暮れ寂しきお元日
肩車初詣の頭見渡して
初詣噛めばくつつく大師飴
背景は真白き富士や初芝居
初芝居声張り上げて子役かな



去年今年

赤座典子

「あたわり」と生きる人々去年今年

再生へ能登の生業春を待つ

飼ひ鳥の御機嫌家居の三ヶ日

年玉と抹茶に終るお正月

寒紅梅抓めば蕾柔かし

路面電車黄の眩しかり初暦

諦めし旅を詠みたる初句会

令和八年明け

秋川泉

初春や鐘つき堂に光射す

元旦の命ことほぎ足洗ふ

元日やだきあげられて鐘をつく

ことほぎて正月膳の和洋中

鈴をふり巫女の舞たる細き指

夜明け前七日の芹の色深き

なはばりを争へる猫雪の朝



秋収集

約しくてむかごこぼしてしまひけり

佐藤 竹僊

木枯に逆らひ走る小学生

秋川 泉

小春日のひとりのけんぱけんけんぱ

妹が逝き己が助かる年の暮

七郎衛門吉保

凜として人寄せ付けぬ枯野原

初神籤良縁有りと今さらに

篠田純子

夢はじめ心配かほの母出でぬ

散逸の詩を落葉に彫る海辺

篠田大佳

友は冬水平線の中にある

降る雪や今年も九条守りたい

須賀敏子



降る雪やお風呂の後はアイスでしょ

まあまあの一日でした寒満月

十二月かじかむ手足痛みあて

調査員厨きれいと言ふ暮に

一人なら蹴散らして行く银杏黄葉

雲も無く今年の取りの冬満月

短日や西の山の端燠赤く

枯枝にとどまる石榴重々し

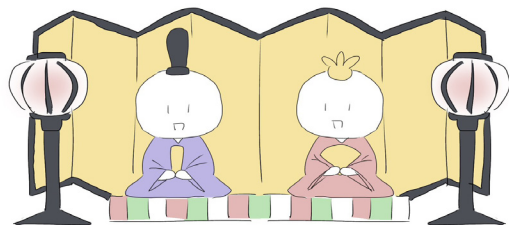
問診のストレスに○開戦日

図書館の隅に静謐賀状書く

長崎桂子

森なほ子

赤座典子



喜孝抄

土竜塚 十一月の日に乾く

佐藤竹僊

土竜塚とは、土竜が地中でトンネルを掘った時に出土が、地表に押し上げられ、小さな山の形になったもの。土が沢山掘り出された後に出来た地下鉄の写真で、土竜塚を連想されたのでしょうか。立冬を過ぎても、穏やかな日和がしばらく続く十一月を、乾くのにふさわしいと句にされたらと、これは私の連想です。(典子)

灌佛のかんばせ見んと膝を折る

佐藤竹僊

かわいらしい子供が興味深々で、花御堂の像をのぞいている。のぞかれる像の面差しもかわいなお顔。どの子供にも平和で幸せであってとお釈迦様も祈っておいでです。(泉)

横風の強き高速冬紅葉

赤座典子

高速道路の強い横風は、運転する人にとっては嫌なもの。しかし、その横に同乗する人にはスリルがあつて冬紅葉が強風に乗って降って来たら美しくステキ。ドキドキするドライブは、魅力的です。(泉)

相寄りて対の陶器や寒の鯉

赤座典子

二尾の寒鯉。冷たい水中で身じろぎもしないでゐる様を詠んでゐる。この句の表現には工夫がある。「陶器のやうに」または「陶器の如く」と比喻表現を避けたところ。それによりかえつて見事な直喩になつてゐる。(喜孝)

太やかに天へ伸び行く時雨虹

赤座典子

「太やかに」は詩歌、特に俳句では使用例をしない。この句ではこの古語が「伸び行く」と勘合し効いてゐる。間近にあらはれた時雨虹をのびのびと感動を抑えて詠まれた。「太やかに」を使用好例(喜孝)

秋時雨 山寺できく浪花節

秋川 泉

山形の、あの山寺で浪曲を聴くというのは、普通は非常に珍しい経験ですよ。でも作者は、その事態をさらりと句にしている印象で、興味深いです。様々な土地に住まわれたという泉さんには、珍しい事ではないのかもしれない。浪曲といえば、昔娯楽の少なかった時代には、ラジオでよく聴いていました。大空の古刹と云われる、山寺に響き渡った曲名は、何だったのでしょうか?(典子)

秋の暮ざわめきの中「眠り猫」

秋川 泉

日光東照宮の「眠り猫」をこのやうに詠む、をかし。夕暮れ間近、観光客も有名な「眠り猫」探しに慌ただしく動く。その中を眠り猫は正に我関せずと眠り続ける。もう一度「をかし」である。(喜孝)

へぎ蕎麦を打つ手休めて熊ばなし

七郎衛門吉保

いやいやこんなに旨い蕎麦を打つ手休めて、しばし熊話しにのめり込んでしまうほど、令和七年の熊出没は大変なものでしたね。

しかし、いいですねえ『へぎ蕎麦』。これはぜひ、その地に赴き食したいものです。(泉)

温暖化熊にも生きる辛さあり

七郎衛門吉保

最近「温暖化」といふ語彙に違和感を覚えるやうになつた。雪害には特にさうおもふ。そのことはともかく、異常気象は熊の生息地である山や森にも変化を及ぼしてゐる。食べ物の量と熊の頭数のバランスが崩れてゐるのだらう。熊がこらえ切れず町に出てきて食べ物を漁る。そこで人と遭遇して事件が起こる。人間にとつて大問題である。晩秋のニュースはこのことでもちぎりであつた。七郎衛門さんはこの問題を熊の側に立ち詠まれた。熊問題に限らずとも多面的に問題を

考へることの大切さをこの句は教えてくれる。(喜孝)

歳晩や目の合ふをんな占師

篠田純子

一年の終わり、忙しい中買物に出る。すると街角に女占師が北風吹く中座っている。あら…と思つた時、その女占師と目が合ってしまった。「ちょっと、そこの方、ここへいらっしやい！」

あなたが今年最後のお客ですよ。新しい年の運勢をみて差し上げますよ」って誘われた。その女の目が切実にそう語っていた。さあーあなたなら、どうしますか。

その女占師、今年最後、稼がねばならない事情がありそうですね。(泉)

ごはごはと絡まるホース十二月

篠田純子

純子さんの意図とは違ふとおもふが火事場の光景がうかんだ。鎮火した現場には数台の消防車から伸びた萎んだホースが路上に折り重なるやうに絡まつてゐる昔日の恐ろしい場面。

この句は散水のホースかもしれない。そのことは置くとしてこの句の「十二月のホース」を「ごはごは」と見事に的確に捉へる。ビニールホースの硬直した感じ。その日の寒さが伝はつてくる。(喜孝)

冬晴れてボスの奢りの今川焼よ

篠田大佳

作者の句としては、珍しく身近な題材です。冬日を浴びながら、ボスと二人で今川焼を頬張っ

ている。それにしても奢られたのが今川焼。最後の「よ」の表す作者の思いとは？想像の幅が、両極端に揺れています。（典子）

A I の嘘を支へに末の秋

篠田大佳

AIは、時々もつともらしく嘘を云うとか。問いかける人の気持ちにそつた嘘も真実味があつて、元氣や幸せ感を与えてくれるようです。秋の終わりは、誰もが物寂しい季節。秘密も守ってくれる良い友人になれそうですね。（泉）

この小道明日はなくなる冬の暮

篠田大佳

国家権力が介しないことには道路が消えることはないのでは。この句はそのやうな野暮な話ではないやうだ。話はそれる。戦後焼け出された我が家はしばらく間借をしてゐた。小さな家に何家族も肩寄せあつて生活した。私の小学校の先生、屑屋お払ひさんもゐた。引越した先はそこから十分も歩かぬ所。その後何十年もこの道を回り道をして避けた。なぜさうしたか未だにわからない。掲句の小道は作者の意志により無くなるのではないだらうか。さうおもへてきた。（喜孝）

久米アナの訃報ラジオで松の内

須賀敏子

私の事で恐縮ですが、私こそがと云うほどの久米宏さんの大ファンなのです。私があんまり好き!!

と云うので、藤穂さんがある時「久米さんて案外いじわるかもしれないよ」と。それを聞いて私は「そんな事……」って。しばし真剣に悩んだり。それも今は昔。なつかしい思い出。こうやってどんどん時は流れ去るのだと訃報を聞きつくづく思う私です。（泉）

§

居職であつた私にはラジオは一日鳴てゐた。耳を向ける時もさうで無いときもダイヤルはTB Sから動いたことはない。久米宏さんの声が聞こえると耳を傾けた。型破りのインタビューでラジオが生き生きとした。ここ数年松の内だからといって平穩には過ぎない。この句の「松の内」と書くことで敏子さんはそのやうなことを詠まれたのであらう。（喜孝）

不自由さ次つぎ増えて冬用意

長崎桂子

この不自由さは、御身体の不調のことでしょうか。それとも、現代と云うこの時代の進歩と云うか 現代的進化に追いつかないと云うことでしょうか。私などつくづく父母の居た「昭和」の頃の冬用意が懐かしくなりません。ゆっくりと時が流れていましたね。

お気持ちも御身体もおいといくださいますよう。（泉）

枯れ色の始まり岸辺にぎはしき

長崎桂子

「枯れ色」だけでは季語として少々怪しい。が「岸辺」と書くことで怪しさがうすまる。次句に「枯

れ色の川辺に遊ぶ老と幼」と詠まれてゐることで「にぎはしき」の作者の意図が推察される。このやうな忖度をせずこの句を読むと常識をはずした面白さがある。青々とした岸辺の景より枯色のきざした岸辺を「にぎはしき」と感じる。このことに同感する私がある。(喜孝)

図書館の木々も電飾クレーン車

森なほ子

35年前、初めて仙台に住んだ時の事。仙台の通りの木々が沢山の電飾で輝き観光客でにぎわっていました。この行事は、まだ全国的に珍しいものでした。その時乗車したタクシー運転手の言葉。「木は冬、葉を落として静かに休む時。そんな時に、こんな風に飾り付けられて休ませてもらえない。かわいそうですよ」と。今ではどこでも見られる風景ですが、この言葉は重く忘れられません。(泉)

追悼句 二句

一 徹は偉人変人枯蠅螂

森なほ子

一 徹の酒は剣菱爛いらぬ

追悼句を詠みたくとも追慕のおもひと、作品の出来上がりを両立しやうとするとさう簡単ではない。この二句は故人の風貌が浮かんで来る。確り書かれてゐる。作者と故人の間柄が分かる気がするから不思議。この句により、よき追悼をされたとおもふ。(喜孝)

遠足の父の爆弾むすびかな

伊藤侑己

(大垣日本大学高等学校B)

『第28回俳句甲子園公式作品集』(二〇二五年 書肆アルス) 所載。俳句甲子園は、高校生による俳句作品のディベート(討論)大会です。チーム戦で句合わせを行い、俳句の良し悪しに加えて、お互いの句を読んで、優れた鑑賞を即興でできるかを競います。掲句は、地方大会に提出された作品です。

「爆弾むすび」はたくさんの具をごはんで包んで丸めて握り、海苔で巻いた大きなおむすびで、豪快な見た目をしています。調理の手間も少なく、お腹いっぱい食べられるため、食べ盛りの子どもや、体力勝負の肉体労働者などに重宝されています。父親が遠足の弁当を作っていて、器用に繊細に作ったお弁当ではなく、ドカンと大きなおにぎりを作るといふ状況を切り取っています。作者の想定している家庭環境はわかりませんが、一つ間違えれば悲壮感が出そうなところを、明るく前向きに描いていて、読む方も元気が出てきます。

篠田大佳

新年・冬の着物 春着と小袖と足袋

七郎衛門吉保

歳時記新年号の、着物の季語は、新春に主に女性がまとう晴れ着の、春着（春衣・正月小袖・春小袖・花小袖）のみであった。

同じく冬号の着物を直截した季語は、小袖のみである。広辞苑で小袖を見ると「袖口の小さい垂領の着物、平安時代は貴族の筒袖の下着、鎌倉時代に袂を加える、やがて武家や庶民もこれになり、近世以降庶民の小袖が発達し、現在の着物の母体となる」とある。

さらに、防寒対策として、表布と裏布の間に、木綿の綿を入れたのを綿入、絹綿を入れたのを小袖として、使い分けていたようである。この他に関連した季語として、冬羽織、ちゃんちゃんこ、ねんねこ、コート、マントなどであるが、専ら寒さ対策の用語で占められている。

和装に欠かすことのできない「足袋」が冬の季語とされていた。足袋は古来よりあったようで、室町時代までは革製で紐結びだったよう、江戸時代に鞋になったとのこと。礼式履物としての足袋もあるが、季節感としては防寒用であり、冬の季語としての位置づけは、おそらくけだしだろう。

地下鉄新富町駅から、あおやぎ句会会場に向かう道すがら、建屋が重要な有形文化財に指定されている、大野屋総本店とある足袋専門店がある。建屋と同じく足袋造りも歴史を重ねているとのこと。

場所柄を反映して歌舞伎役者や芸者さんなど、粋筋からのご最層も多いよう。自分もここの足袋を履くと、粋が増したような気分になる。

みちのくの子の赤足袋の鞋見え 阿波野青畝
足袋脱ぐやわが瘦せし身を念ひいづ 石田波郷

また来ては鏡をのぞく春着の子
九十年生さし春着の裾捌き

加藤耕子
鈴木真砂女



季語あれこれ



《鳥帰る》

三月は人間界も生物界も別れと出会いの季節。雁は北へ帰り代りに南から燕が渡ってくる。

引鶴や惜しみをしみて左様奈良 芝 尚子
引鴨や人は踵をかへすのみ 竹内 弘子
鴨帰り鳥も啼かず日暮かな 森 なほ子
何食べて大きくなりし鴨帰る 亀田虎童子

海一筋黄金に渡り鳥帰る
病窓を縦よこにきり鳥帰る
鳥帰るおいてきぼりにされたやう
中ぞらにVの字の型鳥帰る
鳥帰る心休める國ありと
鳥帰る視界に山の無き暮らし
病室の顔触れ替る鳥雲に
ある日少女家出願望鳥雲に
足し算引き算しろ黒つけて鳥雲に
鳥雲に吾が影ゆき処なく仰ぐ
空財布二つ出てきて鳥雲に
信仰はひとつの遊び鳥雲に
人と来て道を覺えず鳥雲に
鳥雲に痩せ煙突の火の粉とび
医師に肺託して月余鳥雲に
保ちゆく自分の歩幅鳥雲に
線で消す電話番号鳥雲に
入汐はさびしきものと鳥雲に

鎌倉喜久恵
松本 米子
森 理和
長崎 桂子
長崎 桂子
森 なほ子
芝 尚子
堀内 藤穂
堀内 一郎
渡邊 友七
後藤 志づ
堀内 一郎
芝 尚子
渡邊 友七
渡邊 友七
田中 藤穂
田中 藤穂
田中 藤穂
佐藤 竹僊

鳥雲にハモニカの音遠くより
生きてきて戦見るとは鳥雲に

《穴出づ》

熊、蟻、蛇、蛇、蛇、地虫などが冬眠から目覚める。
それぞれに「出づ」を付けて季語となる。

蛇穴を出でて手ごろな縄となる
蛇穴を出るふっきれし物思ひ
穴を出て蛇まだ力みなぎらず
穴を出し蛇の目空のいろ映す
うす赤み黄みどりへ蛇穴を出る
蟻穴を出でて尻尾に定住す

竹内 弘子
関口 ゆき
田中 藤穂
鎌倉喜久恵
長崎 桂子
佐藤 恭子

《春の風》

春になると冷たい風から暖かい風に代る。人の心も体もやはらかくなる。

広広のゴリラの背中春の風
妙義まで足を洗って春の風
自転車のブレーキ刻む春の風
預かりし児のはや寝息春の風

松村美智子
堀内 一郎
篠田 大佳
吉成美代子

水平線に船ぼつこりと春の風
春の風ひよつこりとやや足持てる
春の風老犬の目のうるみを取り
旧道はむかしのままに春の風
トンネルをいでて見上ぐる春の風
春の風反射鏡なる自己責任
独逸から米国からも春の風
春の風海豚のジャンプ高さかな
春の風口あけてゐる動物園
たまさかに黄泉平坂春の風
荷造の鍋釜アイロン春の風
胸うすきとほりぬけたる春の風
父に似て嚏の大きい春の風
卵黄に血の糸まじる春の風
外国語飛び交ふ公園春の風
真新しきブラウスの白春の風
好きな人に象の鼻伸び春の風
抱くかに田草刈る子に春の風

篠田 純子
東 亜 未
芝 尚子
吉成美代子
吉成美代子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
須賀 敏子
佐藤 竹僊
佐藤 恭子
齊藤 裕子
佐藤 恭子
芝宮須磨子
竹内 弘子
東 亜 未
齊藤 裕子
森 理和
佐藤 恭子

オペラハウス七十二段春の風
春の風みんなでつまむ袋菓子
隣子の声太くなり春の風
逆らへば帽子持去る春の風
春の風引っぱって来る男の子
春の風座右に備ふる鉄亜鈴
危ふげなスカートの丈春の風
明け渡す部屋片付かず春の風
春の風魂だけで歩きをり
夕梵の聞こゆ双株春の風
壁のギター爪弾いてみる春の風
春の風まつぼつくりを抱へこむ
春の風おきる少しの出来心
亜米利加のともだち作戦春の風
歌舞伎座のずずんと伸びる春の風
赤ペンと競馬新聞春の風
雪吊のいつぼんあそぶ春の風
あるくほど六腑をあらふ春の風

堀内 一郎
早川 泰江
齊藤 裕子
長崎 桂子
吉成美代子
森 理和
齊藤 裕子
齊藤 裕子
篠田 純子
佐藤 恭子
齊藤 裕子
佐藤 恭子
佐藤 恭子
篠田 純子
篠田 純子
赤座 典子
佐藤 恭子
佐藤 恭子

よろめきて手提袋に春の風
蓮華座の裾にからまる春の風
徘徊る春の風吹く六本木
春の風空より青きセーターを
掘り起こす土の湿りて春の風
細りし首うーんと伸ばし春の風
ねえサルはフレアー・スカート春の風
春の風枝に結んだ落し物
春の風湖面に写る山を消し
立春の風強き宵吾子走る
春の風歩道くるくる鮑脣
シャツズボン竿に絡まる春の風
伽羅の香の流れ来るよな春の風
立春の風の強さにきらめく葉
絵ごろこのなかりし絵にも春の風
耕して何もつくらず春の風
ほどけつつ絡む遺伝子春の風
建物の壁面緑化春の風

大日向幸江
篠田 純子
佐藤 恭子
長崎 桂子
吉成美代子
斉藤 裕子
佐藤 竹僊
秋川 泉
須賀 敏子
秋川 泉
長崎 桂子
長崎 桂子
佐藤 恭子
森 なほ子
亀田虎童子
佐藤 竹僊
篠田 純子
都築 繁子



《春風》

春風はるかぜと読むか春風しゅんぷうと読むか作品にふさはしい読みを読者は強いられる。

春風に犬の毛そよぐ公休日
春風の大きな布のごとくあれ
春風に立てたる指の發光す
春風の喜ばしくも物憂くも
春風にのりて敦煌鴨緑江
春風や二重嶮の犬が訪ふ
春風や昭和は雲の中にある

山莊 慶子
佐藤 竹僊
佐藤 竹僊
早崎 泰江
佐藤 恭子
山莊 慶子
堀内 一郎

春風の軌跡か虚子の筆の文字
春風を吸ひこんである土龍塚
春風駘蕩巡る鶴見の七福神
ハモニカや時に春風暴走す
何処から肉桂春風少しつよく
春風に山羊顎ひげを靡かせる
鶉も鷺も陸で寛ぐ小春風
春風や手押し車に背を丸め
だからだと吹く春風や寺詣
シニヨンに銀のひとすぢ小春風
春風に弾む童謡長命寺
耳もとで春風だよと風のいふ
春風に蓑虫ゆらりゆらりと
銀ぶらのランナー春風に恍惚
春風を受け風の意味悟る稚児
天安てんやすの暖簾春風孕みをり

木村茂登子
田中 藤穂
木村茂登子
森 理和
佐藤 恭子
早崎 泰江
篠田 純子
長崎 桂子
大日向幸江
赤座 典子
篠田 大佳
佐藤 竹僊
須賀 敏子
篠田 大佳
篠田 純子
後藤 志づ

《春の雪》

幸福の木ミイラ化す涅槃西風
墓守の腰の手袋涅槃西風
白隠の片手の公案涅槃西風
水上バスの日の丸捲れる涅槃西風
ゼレンスキー似の漢銀座に涅槃西風
比良八荒地球気配の徒ならず

東 亜 未
芝宮須磨子
木村茂登子
篠田 純子
篠田 純子
七郎衛門吉保

つかの間の消えしせせらぎ春の雪
春の雪水族館がにじみだす
春の雪その一瞬に鳥消える
春の雪桜白蓮消すみたい
贖物の大きな仏画春の雪
すだ椎に大きなうつつる春の雪
相乗りの小銭をさがす春の雪
梅よりも白きものなし春の雪
春の雪節骨兵器となりたる日
催してばつととうす日や春の雪
掃くほどはなけれど路地の春の雪

森 理和
竹内 弘子
赤座 典子
須賀 敏子
田中 藤穂
須賀 敏子
竹内 弘子
佐藤 竹僊
佐藤 恭子
長崎 桂子
森山のりこ

《その他の春風》

貝寄風や帽子飛ばして納骨す

春の雪満目色を違へたる
 春の雪春ウララてふ馬馳ける
 伊右衛門と茶を飲んである春の雪
 小松菜と揚げの煮びたし春の雪
 春の雪からす一声しみわたる
 にぎやかな一日たまはる春の雪
 春の雪メガロポリスを沈めけり
 お雛様に遠来の客春の雪
 青竹の林に落つる春の雪
 地球博スキップする子に春の雪
 春の雪踏んでよろこぶ土不踏
 番傘に太く宿の名春の雪
 傍らにあたたかき人春の雪
 尼寺の引戸にかかる春の雪
 日を置いて書かれし葉書春の雪
 春の雪とまどひ土のふところに
 春の雪白てふ色を残さずに
 湯おもてに浮べし首春の雪

佐藤 恭子
 森山のりこ
 竹内 弘子
 竹内 弘子
 早崎 泰江
 竹内 弘子
 須賀 敏子
 木村茂登子
 早崎 泰江
 齊藤 裕子
 鈴木多枝子
 鈴木多枝子
 鈴木多枝子
 田中 藤穂
 鈴木多枝子
 齊藤 裕子
 長崎 桂子
 東 亜 未
 佐藤 竹僊

肋木に降りては融くる春の雪
 母の忌や記憶に春の雪降り
 西伊豆の達磨山にも春の雪
 春の雪伯母の便りは変らずに
 切りわけのシフォンケーキや春の雪
 春の雪をどりをどりて着地せり
 鯛焼が食べたくなって春の雪
 春の雪ひもじき鳩の歩きをり
 梢よりさつと消えゆく春の雪
 早朝の湯気と豆腐と春の雪
 辛淑玉や樹々には重し春の雪
 春の雪今日の主役の我微熱
 春の雪なにかしらある冷蔵庫
 春の雪しばし墨絵の世界なり
 春の雪猿の顔にはおでこなし
 春の雪いつもの道に旅心地
 涅槃会の朝莊嚴春の雪
 春の雪隣家の灯うすくなる

竹内 弘子
 渡邊 友七
 須賀 敏子
 森山のりこ
 赤座 典子
 竹内 弘子
 堀内 一郎
 篠田 純子
 森山のりこ
 東 亜 未
 須賀 敏子
 森 理和
 森 理和
 早崎 泰江
 東 亜 未
 東 亜 未
 木村茂登子
 田中 藤穂

春の雪斜めななめに線をひく
 雀来て蹴散らしてゆく春の雪
 だるまにはなれずに解けし春の雪
 一分の黙禱ながし春の雪
 ねぎらはれほどけゆくもの春の雪
 野仏のあたま丸く春の雪
 古木の洞埋めるごとくに春の雪
 春の雪紅少し濃く家を出る

堀内 一郎
 鎌倉喜久恵
 東 亜 未
 堀内 一郎
 篠田 純子
 大日向幸江
 早崎 泰江
 田中 藤穂

春の雪スカイツリーの竣工す
 春の雪ココアやさしく香りをり
 児童画のかがやいてをり春の雪
 不老水青竹のふた春の雪
 土手蔽ふ小笹の間に春の雪
 電車待つはや薄白く春の雪
 もう一缶買はねばならぬ春の雪
 歳月に欠けし狛犬春の雪
 春の雪昨夜は雨の音に寝て
 カップ麺曇った窓と春の雪
 とことはに地には着かない春の雪
 肋木の片側につく春の雪
 これがまあまことか五尺春の雪
 私から上昇気流春の雪
 春の雪屋根からどどん解け落ちる
 鬼遣ひあとを清めの春の雪
 春の雪折られし枝のいたましく
 春の雪圧倒的に消えにけり

須賀 敏子
 木村茂登子
 早崎 泰江
 田中 藤穂
 森 理和
 長崎 桂子
 須賀 敏子
 田中 藤穂
 木村茂登子
 篠田 純子
 佐藤 竹僊
 竹内 弘子
 井上 石動
 篠田 純子
 長崎 桂子
 木村茂登子
 須賀 敏子
 井上 石動



あとがき

今月の表紙

二月八日の衆議院選挙の日、東京では雪が降りました。雪が止み、雪が残る近所を散歩していると、日陰の花壇の山茶花に雪が積もり、氷柱ができていました。写真を撮った後、しばらくして同じところに行ったら、氷柱が壊れていました。ほんの一瞬の出来事でした。

(撮影・墨沓)

俳句と着物

七郎衛門吉保さんの連載『俳句と着物』が終了。戦後子供であった私には靴下ではなく足袋をはいてみた。元旦の枕元に新しい履きにくいがうれしい足袋が置かれてみた。寝る時もバジヤマではなく俗に云ふ寝巻であった。大人も和服を日常着にしてみた。着物を着られるひとが減らないやうな日本であつてほしい。吉保さんに『E』で足袋何文だか忘れたといつたら今はセンチだよと笑はれた。

桜

もたもとと三月号を作つていたら「石神井川の桜が咲き始めたよ」と電話が入つた。出不精なわたしも重い腰をもちあげて出かけた。あるお屋敷の道路際に老木が花を咲かせてゐるのに自転車を停めた。この桜、道に枝がはみ出してくるのを危惧してかざたずたに伐られて無惨な樹形になつてゐる。ところが花は若木と遜色ない。透き通るやうな美しさ。この切られ与三のやうな老木、なにも文句を言はずただただ花を咲かせる。見事なものだ。

(喜孝)

二〇二六年三月号

発行日 三月二十三日

発行所 〒177-0042

東京都練馬区下石神井一丁目六の三

サンハイツ石神井2 一階

電話 090 9828 4244 竹僊房

印刷・製本・レイアウト 会費 一五〇〇円(送料共) / 一年

カット／福井美佐子・ティリ エイマ

ゆつちよ銀行(普) (店番018) 4586402

佐藤 喜孝(サトウ ヨシタカ)